宇　陀　市

～大和高原の中心都市として魅力あふれるまちづくりを目指す～

奈良県北東部の大和高原に位置する宇陀市は、記紀万葉の時代から栄え大和平野や吉野とは異なる歴史文化を持つ城下町や、面積の約 4 分の 3 を占める山林など、地域資源が豊富な高原地帯の中心都市として発展してきました。また、「大和高原宇陀ブランド」の展開、歴史文化遺産や自然環境を活用した観光振興、宇陀市立病院を核に医療と福祉が一体となった「健幸都市“ウェルネスシティ宇陀市”」実現に向けての取組みなどを通じ、持続可能なまちづくりを目指しています。

Ⅰ　概要

1．地理・歴史

宇陀市は、県北東部の大和高原に位置する人口 31,105 人（県内 39 市町村中 12 位）、世帯数 11,155 世帯（同 12 位）、面積 247.5km^2（同 6 位）の市である（総務省「国勢調査 人口等基本集計」(2015 年)）。

同市は 2006 年、旧大宇陀町、旧菟田野町、旧榛原町、旧室生村の 3 町 1 村が合併して誕生し、市としては県内で最も新しい。

近鉄榛原駅および旧大宇陀町の城下町は住居や商工業施設が集まっており、山間部には集落が点在している。淀川水系の宇陀川が北東方面に流れており、中央部には奈良盆地の水資源確保のため建設された室生ダムのダム湖、室生湖がある。

大阪と名古屋のほぼ中間に位置する名阪国道の針 IC から市内へは国道 369 号線で、また桜井市へは国道 165 号線で結ばれており、物流面で優位性のある道路ネットワークを有する。また国道 165 号線にほぼ併行して近鉄大阪線が東西に走り、市役所の近くに榛原駅、室生寺などの観光拠点となる室生口大野駅、「道の駅 宇陀路室生」近くの三本松駅の 3 駅がある。榛原駅は特急停車駅で、急行でも大阪市内に 1 時間以内で到着できることから、朝夕は通勤・通学の利用者が多数乗降する。旧大宇陀町、旧菟田野町には鉄道はなく、それぞれ国道 370 号線、国道 166 号線により吉野町、東吉野村とつながっており、両線の分岐点には「道の駅 宇陀路大宇陀」がある。

中世には同地に秋山・澤・芳野の 3 氏が台頭し、それぞれ居城を構えた。その後各氏は豊臣家等の支配下に入り、関ケ原の戦いの後、福島孝治により秋山城が改修され宇陀松山城となり、城下町の整備も進んだが、福島氏の改易により宇陀松山城は破却された。

宇陀市の位置図

2006 年に重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）に選定された宇陀松山は、城下町から商家町として発展する中で、近世から昭和前期までに建てられた町屋などの建築群、石垣、水路などの歴史的風致が維持されている。

国史跡　松山西口関門（黒門）

2．産業構造

従業地による就業者人口（15 歳以上）の産業別割合を見ると、第 1 次産業が 12.6%、第 2 次産業が 18.7%、第 3 次産業が 68.7% と、奈良県全体（順に 3.4%、22.2%、74.4%）に比べ、第 1 次産業の割合が高い（総務省「国勢調査 従業地・通学地による人口・就業状態等集計」(2015 年)）。

農業経営体は 1,219 経営体（県内 3 位）で、そ

のうち株式会社の農業法人が 10 社（県内 2 位）あり、ビジネスとしての農業が盛んな地域である。稲作のほか冷涼な気候を活かしたレタスなどの高原野菜を中心に経営耕地総面積は 988ha（同 3 位）ある一方で、耕作放棄地面積は県内ワーストの 505ha となっており、後継者問題などの課題を抱える（農林水産省「農林業センサス」（2015 年））。また奈良県のブランド牛肉「大和牛」の主要生産地として畜産が盛んな地域で、同市の一次産業の強みとなっている。

民営事業所数は 1,302 か所（県内 10 位）あり、従業者数は 7,502 人（同 15 位）。従業者数の特化係数※1は、「なめし革・同製品・毛皮製造業」（30.2）と「木材・木製品製造業（家具を除く）」（12.7）（総務省・経済産業省「経済センサス－活動調査」（2016 年））の製造業 2 業種が突出して高くなっている。

※1 ある産業の地域内における従業者比率を、全国における従業者比率で割って求められる数値。1 より大きいほど、その産業に特化していると捉えられる。

なお、製造業の製造品出荷額等（従業者 4 人以上）は 98 億円（県内 22 位）となっている（経済産業省「2019 年工業統計表 地域別統計表データ」）。

3．人口構造

年齢階級別人口移動（2010 年→2015 年）を見ると、20 歳代～30 歳代前半の転出超過が著しく、進学・就職・結婚を機に地元を離れる傾向が強いことを表している（総務省「国勢調査 移動人口の男女・年齢等集計」（2015 年））。

Ⅱ　市の活性化に向けた様々な取組み

同市は 2020 年 6 月の市長選で初当選した金剛（こんごう）一智（かずとし）市長のもと、「大和高原の中心都市として存在感が強い、誇りと活気あるまちづくり」「誰ひとり取り残さないまちづくり」を目指すべき大きな目標と定め、新たな市政に取組んでいる。

1．大和高原宇陀ブランドの展開

同市は県内随一の肉牛の生産地で、また大和高原の野菜は寒暖の差や豊かな土壌により優れた品質を誇り、奈良ブランド・大和野菜の伝統野菜（大和まな、宇陀金ごぼう、祝（いわい）だいこん等）やこだわり野菜（大和完熟ほうれん草等）として出荷されている。また林業は吉野林業とともに育まれた磨き丸太（銘木）の産地であるほか、手入れが行き届いた里山が多く出材がしやすいことから製材業が地場産業として発展している。さらに製造業では、毛皮革製品のなめし、加工、縫製、販売までの一貫システムを有する産地となっている。

一方でこれらの特産品は、その本来の価値と比べると、市外での認知度がそれほど高くないことが課題となっている。

今後は、宇陀のイメージと合致し、かつ他地域の人にもわかりやすいブランド名で認知度向上を図っていく方針で、「大和高原宇陀ブランド」はそのイメージを統一する有力なキーワードとなっている。

伝統野菜「宇陀金ごぼう」

磨き丸太

毛皮革製品

株式会社春日　i-deer マスク
（キョンセーム※2フィルター）

※2 キョンセーム：中国、台湾に生息するシカの一種キョンの皮を加工したもの。

2．観光振興

○歴史文化遺産・自然環境

宇陀松山地区や女人高野として名高い室生寺などの歴史文化遺産に加え、「室生赤目青山国定公園」の一部を形成する豊かな自然環境にも恵まれており、観光地としての魅力を十分有する同市ではあるが、知名度の面から誘客には限界がある。ついては同市の特性を活かした独自の方向性で観光振興に取組んでいる。

宇陀松山城跡（左）と CG 再現画像（右）

○スポーツツーリズム・ヘルスツーリズム

同市の冷涼な気候はスポーツ大会や合宿に向い

ており、全日本学生軟式野球選手権大会を共催するなど全国的なスポーツ大会にも携わっている。また還暦野球の全国大会を主催するなどユニークな取組みも行っている。これらは開催日や合宿日のほか、準備段階から市内の宿泊施設や飲食店に波及効果があり、大会後には市内観光により同市の魅力を知ってもらうことができる。同市ではこれらをスポーツツーリズムと位置づけ、スポーツによるまちづくりに力を入れていく。

また同市には宇陀市立病院に加え医療設備の整った民間病院もあり、県東部地域では医療体制が最も充実している。また市内の宿泊施設では温泉が利用できることからヘルス・ツーリズムへの取組みも注目される。

〇観光を巡る新たな動き

コロナ禍においては長距離の移動を伴わない近場で過ごすスタイルの旅行が注目されている。同市は大阪、名古屋などの大都市から比較的近く、歴史文化遺産や自然環境にも恵まれており、三密回避の観光地としてのポテンシャルは高い。

「奈良カエデの郷ひらら」は、NPO 法人が廃校の木造校舎をそのまま観光施設として運営していたが、映画やコスプレの撮影会が SNS で発信されたことで、最近は若者を中心に人気の観光地となっている。

奈良カエデの郷ひらら

〇観光地としての魅力向上への取組み

「女人高野 室生寺」が 2020 年 6 月に日本遺産に認定されるなど同市の観光地としてのポテンシャルは高まっている。今後同市では宇陀松山城跡の環境整備や CG での再現、市内観光地の駐車場やトイレの改修など観光地としての魅力向上につながる取組を進めており、観光客数の増加が期待されている。

3．健幸都市“ウェルネスシティ宇陀市”実現に向けての取組み

「健幸都市」とは、市民の誰もが健康で幸せと思えるまちを表す。「ウェルネスシティ宇陀市」では「人々が身体面の健康だけでなく、生きがいを感じ、安心して豊かな生活をおくれるまちを目指す」という考えのもと、「健幸」をまちづくり政策と連携させ、健康寿命の延伸や医療費抑制につなげていくことを目指している。

豊かな自然と川、歩いていく道を表現したロゴ

〇ウェルネスイベント等の取組み

同市では、「ラジオ体操」の普及、検診やイベント参加でポイントが付与され抽選で記念品が当たる「健康ポイント」、ウォーキングやハイキングなど気軽に参加できる「ウェルネスイベント」など様々な取組みによりウェルネスシティの具体的な施策を推進してきた。2020 年 8 月には大塚製薬株式会社と連携協定を締結し、同社より熱中症や健康全般、子供向けの教育に関する情報提供を受けるなど、トレンドの変化に合わせた新たな取組みも行っている。

〇地域包括ケアシステムの推進

また同市では、宇陀市立病院などの医療機関や医療・介護にかかる専門職との連携、さらには多世代間の交流や見守りについては市民からの協力も得て、地域医療・介護の充実に取組んでいる。このように面倒見のよい医療・介護体制の構築を通じ、高齢者になっても地域で元気に暮らし続けることのできる地域づくりを進めている。

4．持続可能なまちづくり

同市においては奈良県全体と比べても少子高齢化、人口減少が速いペースで進行しており、持続可能なまちづくりは重要課題となっている。金剛市長は元奈良県職員で、都市計画の担当者、また土木工学の専門家として、まちづくりの経験が豊富。同市長は、持続可能なまちづくりを進めるの

にあたり、地域を熟知する各市町村の役割はこれまで以上に大きくなると考えており、同市の特性を生かしたまちづくりに取組んでいく意向である。

〇榛原駅周辺地区の活性化

同市の玄関口である榛原駅周辺地区は、伊勢本街道と伊勢街道（あを越え道）の分岐に位置する宿場町として発展してきたが、現在は商店街に空き店舗が多く賑わいは失われている。また、ニュータウンは高齢化が進み空き家が増加している。これらの課題に対し「近鉄榛原駅周辺地区まちづくり基本計画」に奈良県と連携して取組んでいる。駅前を大和高原の玄関口としてふさわしいデザインにリニューアルするとともに、駅周辺地区の活性化につながる情報発信を強化していく方針としている。

〇新たな公共交通を実証実験

大宇陀地区の南部は民間バス会社が撤退したため市営バスを運行しているが、利用客は非常に少なくなっている。ほとんどの利用者は通院目的であるが、バス停までの足がなく利用が低迷していることを踏まえ、「自家用有償旅客運送制度※3」を活用し、地域住民に有償で自宅乗降できる新しい取組みの実証実験を 2020 年 12 月より開始している。奈良県では初の試みで、高齢者の見守り効果も期待できることから、過疎地域のモデル事業となる可能性もあり注目される。

※ 3 自家用有償旅客運送制度：バス・タクシー事業が成り立たない場合であって、地域における輸送手段の確保が必要な場合に、市町村や NPO 法人が自家用車を用いて提供する運送サービス。

5．官民連携プロジェクト

〇Next Commons Lab 奥大和（NCL 奥大和）

2016 年 12 月、同市は奈良県とロート製薬の 3 者で地域の魅力的な資源を活用した仕事づくりに関する連携協定を締結し、食や農の分野を中心としたプロジェクト「NCL 奥大和」を立ち上げた。このプロジェクトの特徴は、同市が国の地域おこし協力隊の制度を活用し全国から募った「仕事づくり推進隊員」に対し、ロート製薬が起業支援を行うところにある。現在各隊員は、クラフトビールづくり、ジェラートショップ、宿泊施設の運営、ホースセラピー（乗馬や馬との触れ合い等の体験）など様々な業界で新たな挑戦に取組んでおり、地域資源の活用や隊員の定住は地域経済の活性化に寄与している。

〇薬草の生産、商品開発

日本書紀によると推古 19 年（611 年）に「うだのに薬猟（くすりがり）す」と記載があり、これはわが国最初の薬猟（鹿の若角や薬草を摘んだ日本古代の習俗）の記録である。また大手製薬企業の創業者の輩出、現存する日本最古の私設薬園である史跡「森野旧薬園」が存在するなど、同市は薬草との関わりが深い。

現在同市では、奈良県、薬草の生産者と連携し「宇陀市薬草協議会」を創設。大和トウキを中心とした薬草の生産、商品開発に取組んでいる。

薬草・トウキ

推古時代の薬狩り（星薬科大学所蔵）

宇陀市が誕生して間もなく 15 年。今後、地方交付税の特例措置など市町村合併に伴う国の支援はほぼなくなることから、地域の魅力を高めヒト・モノ・カネを呼び込むことで地域経済を循環させていくことがより一層重要となる。

金剛市長は「市が地域商社になったつもりで地域の魅力を売り込んでいきたい」と語る。「大和高原の中心都市」として同市のポテンシャルは高く、新たな市政での各施策の展開が期待される。

また、新たなことにチャレンジする機運も高まっている。金剛市長によると同市の人口（約 3 万人）は行政サービスの実証実験を行うのにちょうどよい規模だという。同市の新たなチャレンジを見守っていきたい。

（秋山利隆、太田宜志）